

『中国新聞』の報道に思う

酒井 董美 ただよし

18日に『中国新聞』の寺本菜摘記者の取材を受けた。『QRコードで聴く島根のわらべ歌』を出版したことについてである。

この取材については、いろいろな因縁がある。それは寺本さんが、筆者と同じ島根半島四十二浦巡り再発見研究会の会員であることに端を発する。先に木幡育夫事務局長さんに、この本出版のエッセイを送っておいたところ、木幡さんの判断で会員にコピーを会機関係と共に配布されたことで、会員の寺本さんの目にとまり、取材につながったのである。

記事は20日の同紙島根版にトップ記事で報道された。筆者の写真もカラーで大きく扱われている。その説明文は「収集した膨大な録音資料を背に、3部作をPRする酒井さん」となっている。

次に見出しを並べておく。「QRコードで聞く古老のわらべ歌／県内歩き収録 民話・民謡編も」となっていた。記事の中にはQRコードも入れてあり、これをスマホで開いて聴くと、筆者が昭和35年(1960)8月1日に、邑智郡桜江町川越(現在は江津市に編入されている)で慶応4年(1868)生まれの原田トメさん(当時92歳)から聞いた「ツクシ摘みのわらべ歌」が、次のように紹介されている。

彼岸坊主はどこの子 杉菜のかかあのオト息子 (春の彼岸に生えてくるつくしはどこの子だろう。スギナのお母さんの末の息子だよ)



『中国新聞』は広島に本社のあるブロック紙である。

ところで取材した寺本さんは、松江市の人。聞けば城北小学校、松江一中、松江東高校、北海道大学出身とのこと。筆者は城北小学校の前身、北堀小学校、松江一中出身なので、ここまでは同窓生といってよい。そのような親しみからか、きめ細かく取材を受け、写真では残り二冊(『QRコードで聴く島根の民話』『QRコードで聴く島根の民謡・労作歌』)も併せて持っている姿で撮影してもらっている。

わらべ歌、労作歌、民話などは、貴重な無形民俗文化財なので、QRコード付きの書籍にして保存しなければ、歌われなくなって忘れ去られてからでは、形として残らないという危機感から出版したのであるから、『中国新聞』のようなマスコミの協力のお蔭で多くの方々に知ってもらえることになる。これは著者としては非常にありがたいことなのである。(元島根大学法文学部教授)

